

信者の内に働く聖霊 パート2

1A 証しを立てる力

1B 広がる福音

2B 生きる証し

1C 真実な証人キリスト

2C 私たちの葛藤

3C ペテロの例

2A キリストへの似姿

1B 神のかたち

1C 人の墮落した姿

2C イエス・キリストにあるかたち

2B 御霊による回復

1C 肉の弱さ

2C 助けてくださる方

3C 約束の地への道

4C 誇ることのできない御業

5C 御霊から御霊へ

本文

聖霊シリーズ、今晚は、「信者に働く聖霊」という題名で第二弾に入りたいと思います。前回第一弾は、聖霊によって私たちを神は真理に導くこと、御言葉を悟り、それを思い起こさせてくれる働きをされることを学びました。今回は、キリストに似た者にされるという働きを見ていきます。

1A 証しを立てる力

1B 広がる福音

使徒の働き 1 章を開いてください。イエス様は甦られてから、四十日の間、神の国のことを語りました。そしてこう言われました。「父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。(5節)」弟子たちは、神の国がいつ立ち上がるのか、そちらのほうに興味がありましたが、イエス様は、それは父なる神が定めておられることで、あなたがたは知らなくてもよい。そしてこう言われました。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。(使徒 1:8)」

聖霊のバプテスマは、地の果てにまでイエス様の証人となるための力を与えます。これが使徒の働き全体のテーマです。どのように使徒たちが、地の果てにまでイエスの証人となっていくか

をルカは書き記しています。聖霊によって彼らは福音を語り、そしてついにパウロがローマで軟禁状態であるけれども、自由に福音を伝えていたところで終わります。

2B 生きる証し

そこで、私たちキリスト教会は福音宣教をイエス様から与えられた使命として持っています。福音を伝えることは、神からの命令です。そしてそれを成し遂げる力は聖霊に拠ります。けれども、忘れてはいけな、ただ口で、言葉で福音を伝えること以上のことが、証しには含まれていることを知らないといけません。それは、「証人となる」というイエス様の言葉です。証言をするだけでなく、自分そのものがイエス・キリストの証言となっている、その生活を持っているということです。イエス・キリストが私たちの生きている中で人々から見えているか？ということです。

私たちはしばしば、口ではイエス・キリストの名を発しても、その歩みはその証言にかなっていないことが起こります。教会ではクリスチャンらしく振る舞うことはできるかもしれませんが、外に出てまるで違った自分がいたら、恥ずかしいですね。私の母がまだ求道中の時だったでしょうか、病院か何かの駐車場で、教会に通っているある人が他の人の駐車のことと怒っていて、罵っている言葉を聞きました。声をかけたら、青ざめてしまったということです。私たちがキリスト者として、互いに集まっている時に御霊の愛と平和で満たされたら、今度はキリストの權威によって遣わされて、どこにいても聖霊の力でキリストのように生きるようにします。

1C 真実な証人キリスト

イエス様は、黙示録で「忠実で、真実な証人(3:1 等)」と呼ばれています。何をもって忠実で真実でしょうか？父なる神を忠実に、真実に証言しているということですね。神を知りたいのであれば、イエス様を見ればまさに、神が誰なのかを知ることができます。ピリポがイエス様に、「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」と言ったときに、イエス様は言われました。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください。』と言うのですか。(ヨハネ 14:9)」

では、クリスチャン、あるいは「キリスト者」という名前はどこから始まったのでしょうか？アンテオケの教会です。「バルナバはサウロを捜しにタルソへ行き、彼に会って、アンテオケに連れて来た。そして、まる一年の間、彼らは教会に集まり、大ぜいの人たちを教えた。弟子たちは、アンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。(使徒 11:25-26)」キリスト者は、もともと「小さなキリスト」のような意味合いがあります。彼らを見ていると、キリストのようだという未信者からの呼称でした。ですから、彼らがいかにキリストにぞっこんで、この方から目を離さず、この方といっしょにいることを願っていたかがわかります。そして全てをすてて、キリストに満たされることを求めているのでした。

2C 私たちの葛藤

イエス様を見たら父なる神を見ることができるように、私たちを見たらイエス・キリストが見えるようにする、というのが神の御心です。これは大きな山のように見えてしまいます。自分がどれほどキリストに似た者にされているのか、コリント第一 13 章を読むと良いです。4 節から、「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。(4-7 節)」ここの「愛」の部分に自分の名前を入れて読みます。どれだけすわりが悪いか、と私は思います。けれどもここに、「イエス」と入れてみると、すべてがすんなりいきます。このギャップ、差異が私たちの課題なのです。

いつか、WWJD という標語がクリスチャンの間で流行りました。What would Jesus do? という言葉の省略です。ある状況の時にイエス様だったらどうするのか？ということですね。この言葉を聞いた時に、私はすぐに次の御言葉についてのことを思い出しました。「私には、自分のしていることがわかりません。(ローマ 7:15)」イエス様のようにしようとしても、自分はその正反対のことをしてしまう。イエス様がしてはいけないと言われることを、かえって行っている自分を発見します。自分の霊は神の律法を行いたいと願っているのに、肉は従わないと強く言っているのです。イエス様のようになりたいと思っても、肉の性質が霊に反することを行ないます。「なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。(ガラテヤ 5:17)」

3C ペテロの例

ペテロのことを思い出してみましよう。弟子たちが最後の晩餐を終えて、イエス様と共にオリーブ山に向かいました。イエス様は、これからあなたがたはわたしのゆえにつまずきます、と予告されました。ペテロは、「たとえ全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。(マタイ 26:33)」と言いました。イエス様は、「今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。(26:34)」と言われました。

イエス様がゲッセマネの園で苦しみもだえる祈りをささげられました。しかし弟子たちは眠ってしまいます。そこでイエス様が言われます。「心は燃えていても、肉体は弱いのです。(マタイ 26:41)」霊はやり気を持っていても、肉は弱いのです。それでペテロは、イエス様が言われたように見事に、この方を知らないと言いました。ですから、肉に勝利する方法は聖霊の力のみであります。ある牧師さんのブログ記事にこう書いてありました。「敵を愛せ」を論理的に実践しようとしたら全人類を愛さないといけなくなる。論理で考えてはいけません。まず「私にとって大変な人」一人だけに絞って、「敵を愛せ」という神の御心と「愛せない」自分の現実をしっかり受けとめて祈り、自分の力ではなく聖霊の力に頼ることによって、乗り越えられる場合もある。一人に対してそれができたなら、

二人三人と神の恵みが広がっていく。」¹使徒 1 章 8 節の、「あなたがたは力を受けます。」の「力」は、デュナミスです。英語のダイナマイトの言葉がそのギリシヤ語を由来としています。この力が私たちに必要です。

使徒の働きにおけるペテロは、別人のようです。ペテロは、カヤパ邸の中庭でイエス様を三度、否定しました。そこでサンヘドリンが臨時に招集されていました。そして、イエス様がよみがえられ五十日が経ち、聖霊が降り、それからエルサレムで教会が生まれました。ペテロとヨハネが、足なえの男をイエスの御名で直したということで、サンヘドリンが招集されました。そこで、ペテロは中庭ではなく、その指導者たちのど真ん中に立たされて、尋問を受けたのです。

「あなたがたは何の権威によって、また、だれの名によってこんなことをしたのか。」という誘導尋問でした。神の名以外の名で奇跡を行ったら、それは偽預言者で殺されなければいけないという律法があるからです。それにひっかけようとしています。けれどもペテロは、大胆に宣言します。「そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。「民の指導者たち、ならびに長老の方々。私たちがきょう取り調べられているのが、病人に行なった良いわざについてであり、その人が何によっていやされたか、ということのためであるなら、皆さんも、またイスラエルのすべての人々も、よく知ってください。この人が直って、あなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのです。『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった。』というのはこの方のことです。この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」(使徒 4:8-12)「いかがでしょうか、カヤパ邸の中庭にいた時は「あなたも、あの人の仲間でしょうか？」と女中に聞かれて、イエス様を否んだのに、今はこれだけ大胆です。聖霊に満たされたからであります。私たちも、聖霊に満たされた生活をし、そしてイエス様の力ある証しを立てていきたいと願います。

2A キリストへの似姿

1B 神のかたち

その証しについて、ローマ 8 章 29 節には「キリストのかたちに変えられる」ということでパウロが話しています。「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。」御子のかたちに変えられる約束です。神が世界を造られてた時に、主は人を、ご自分のかたちに造られました。「そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。(創世記 1:26-27)」神のかたち、神に似せて私たちは造られました。

¹ <http://araara-fumufumu.cocolog-nifty.com/blog/2014/08/post-25a4.html>

1C 人の墮落した姿

けれども人は、そのかたちから落ちてしまいました。人間本来の姿ではない姿を私たちは今、人間の中にみます。これが元々の神の目的ではないことを私たちは知るべきです。私たちは人に失望してしまいます。また自分にも失望します。それで、「なんでこんな世界に神は造られたのか。」と非難するのですが、それは墮落した人間を見ているからです。パウロは、その姿をローマ 1 章 28 節からこう話しています。「また、彼らが神を知ろうとしないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪くみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。(1:28-31)」

2C イエス・キリストにあるかたち

そこで私たちは、神の意図しておられる人の姿を見るためには、まずイエス・キリストを見るのです。イエス・キリストの中に神が私たちに用意しておられる形があります。イエスこそが、神に似た者として生きておられ増した。「そのばあい、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。(2コリント 4:4)」また、こうもあります。「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。(コロサイ 1:15)」

2B 御霊による回復

1C 肉の弱さ

そこで神が、キリストにあつてご自身の形を私たちの内で回復させようとしておられるのが、大きな目的です。罪によって損なわれたその形を、私たちのうちに作り上げられます。それを行なう方は御霊なのです。「ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。(ローマ 8:12)」「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。(ガラテヤ 5:16)」

2C 助けてくださる方

イエス様は、「自分を捨てて、自分の十字架を日々負って、そしてわたしについてきなさい。」と言われましたが、たった一人でそれを行なうように命じられておられないのです。助け主であられる聖霊がその命令を守ることができるように内に住んでくださっています。

3C 約束の地への道

旧約聖書の中に、御霊の生活の型になっている出来事があります。それは出エジプト記とヨシュア記です。イスラエルの民がエジプトから出てきました。エジプトはこの世を象徴して、パロはサタンを表していました。そこからキリストの流された血によって贖い出されたことを、過越の子羊が表

していました。そして分かれた紅海を渡ります。それは水のバプテスマを表していました。

けれども、それが贖われた民の目的ではありません。贖われた民は、乳と蜜の流れるカナン
の地に住むことが目的です。彼らは不信の罪を犯して、すぐに約束の地に入れるところを、四十年間
さまよわなければいけなくなりました。一世代がそこで死に絶え、新しい世代がモーセと共にヨル
ダン川の西まで来ました。そこでモーセは死にました。そして後継者であるヨシュアが入ります。

ヨルダン川を渡ります。これが、「自分に対する死」であります。自分が十字架に付けられて死ん
でいる者だとみなして、御霊に導かれていくことを決めることを表します。肉によって敗北するの
ではなく、いのちの御霊に投げ頼んでいく決断です。それで渡りました。すると、これまでは決して倒
すことはできないと言っていた、あの巨大な敵どもにことごとく勝利していったのです。これが御霊
による勝利の生活です。

けれども、それは徐々にでありました。決して一気に追放したのではありませんでした。一つの
敵を倒して、少しずつ土地を所有していったのです。これは、御霊によって変えられる生活をよく表
しています。神は、私たちの肉の領域を少しずつ御霊によって打ち勝つようにしてくださっています。
少し前に進めば、次にまだ肉の支配のある領域を示してください。もし一気に神が示されたら、
たぶん私たちはぶったまげて倒れてしまうでしょう。主は優しい方なので、忍耐して待って、私たち
が信仰によって、御霊によって肉の領域を少しずつ示されるのです。

4C 誇ることのできない御業

私たちはしばしば、御霊によって勝利すると、「私はこれでしっかりとしたクリスチャンになれた。」
と自負してしまいます。それで、自分でやっつけようとしてします。そこで神は、私たちがするに任せら
れます。自分でやって失敗して、それで「主よ、私はだめです。何もできません。どうか助けてくだ
さい。」と祈るようにされます。そこから主は御霊によって働かれます。いつまでも、御霊に投げ頼
むように、私たちが自分たちでやろうとすると、失敗することを許されるのです。このようにして、
徐々に、自分がいかに弱い存在か、自分の肉は十字架につけてしまわないといけないのかを学
び、それで御霊に投げ頼むことを学ぶのです。

そして御霊によって勝利する時に、私たちは自分を誇らせないように働いてくださいます。こ
れはチャックが分かち合っていた話ですが、教会に海軍を退役した人がいたそうです。そして、イ
エス様を受け入れて、うれしくていつも賛美していました。ところが、注意を払ってなくて、芝刈り
をしている時に、木で額をぶつけてしまい、芝刈り機は自動で先に進んでいきました。額は痛みで
ずきずき痛みました。芝刈り機を追っていき、スイッチを決して、奥さんのところに走っていったの
です。彼は叫びました。「すごい、木にぶつかったのに、罵り言葉を使わなかった！」そうです、海
軍は口の悪さで有名だからです。けれども奥さんが言いました。「何言っているのよ、罵り言葉
を使わないでもう六か月になりますよ。」そう、イエス様を受け入れた時から使わなくなっていたので

す。彼自身がそれに気づいていませんでした。

「それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれました。どういう原理によってでしょうか。行ないの原理によってでしょうか。そうではなく、信仰の原理によってです。(ローマ 3:27)」信仰の原理によって生きることができるよう、そして肉の誇りをなくすために、神は御霊で私たちを変えてくださいます。

5C 御霊から御霊へ

最後に、神のすばらしい約束を読んでみましょう。「しかし、人が主に向くなら、そのおおいを取り除かれるのです。主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。(2コリント 3:16-18)」